

Abflug 2012

創造の揚力

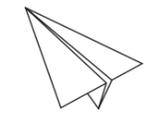
2012.2.13(mon) - - - - - 2.23(thu)
11:00-19:00 *close : Sun TURNER GALLERY 3・4F

- 石井あゆみ
- 井上琴文
- 佐々木耕太
- 千田瑞穂
- 野内俊輔
- 半田尚子
- 松本加奈
- わたなべももこ

- Ayumi Ishii
- Kotomi Inoue
- Kota Sasaki
- Mizuho Senda
- Shunsuke Nouchi
- Naoko Handa
- Kana Matsumoto
- Momoko Watanabe

ギャラリートーク
2月13日(月) 16:00 ~
ゲスト: 栗田大輔(美術批評)

レセプションパーティー
2月13日(月) 19:00 ~



「Abflug2012 一創造の揚力」によせて

離陸を意味する「Abflug 展」=東京造形大学母袋ゼミ有志を中心とする卒展は、昨年引き続きターナーギャラリーで開催される。昨年は記録的な雪に見舞われた初日、恒例のギャラリートークに美術評論家、鷹見明彦氏は重病を患って来廊、若き作家にメッセージを送って下さった。が、その展覧会が結果的には氏が最後に目にした展覧会となったのだった。その後まもなく我々を襲ったあの3月11日は卒業式を奪うことにもなり、氏からのエールを胸に出品者たちは離陸していったのだった。

3月11日以来、その日を契機にそれぞれの専門性は、厳しくその本質と胆力を問われることとなった。美術もまた圧倒的な現実を前に美術の位置、役割を問われ、聖顔布を起源の一つとする絵画もその使命が強く問われている。そんな中、最終学年を迎えそれぞれは作品制作を、そしてゼミの中での多くのディスカッションをとおして自らの仕事を見つめ、問い、制作と概念形成につとめた1年であった。その成果がまもなくギャラリーに運ばれるのだ。ところで、そんな3月11日という特別な日を受けて最終学年を過ごし卒業していく彼らは、他の世代とは異なる何か特化した特徴を有すと後に記述されることになるのだろうか？

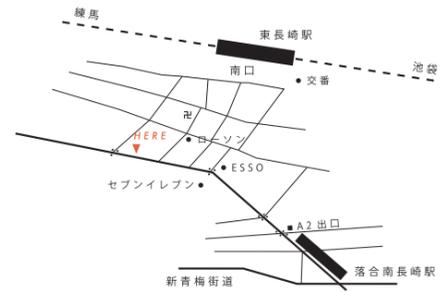
絵画は実体であり虚である両義を生きている。今回のように圧倒的な現実を前にした時、現実からは遠いところに現出する“リアリティの世界”は、現実から乖離した絵空事のようにも映ってしまうのである。現実・リアルな世界は、この世界と非常によく似た、しかし実体を持たない精神だけのもう一つの世界と隣接しているかのようである。そこは真理や普遍の世界であり、黄泉の国、まだ生まれてこない人々の世界で、その世界との接近を人々は崇高とか超越と呼ぶのだが、この二つの世界は、ほんのわずか重なり合い、そこにすき間を生じさせている。その両義の中間領域こそが現出の場なのであり、その現出はリアリティ、シミュラクル、シャイン、アンフラマンズなどと呼ばれるのである。絵画、それは実体そのものではなく、空間性に働きかける像、薄い膜のようなものであり、もともと現実、リテラルの側にはないのであるが、現実・リアルを超え、実体性と超越性を確保することも可能とするのだ。

それぞれはその中間領域への働きかけとして、松本加奈は、もともとリテラルの側にはない色彩そのものを石膏に吸収させ、時間、リアリティの可視化を、半田尚子は、夢、記憶、匂いというリアリティ自体をテーマに写真メディアによって、石井あゆみは、今もはっきりと記憶として残る幼児期の広大な自然での体験の実在化を有機的な立体オブジェクトに、千田瑞穂は、自らの内に潜む闇部、過去、死をスクラップブック、絵画インスタレーションによっての顕現化に託し、野内俊輔は、ボードリヤールのシミュラクルを援用、絵画、写真、映像等の多様なメディアを像としての再組み換えとして、佐々木耕太は、レオナルドが「内部に光と陰を携えている」と言わしめる絵画を再びリテラルな絵具の物性を明暗のイルージョンとして回収し、わたなべももこは、透過性のある薄布をレイヤー状に重層化させフラジャイルでナラティブな描画によって、井上琴文は、画面と接触する瞬間に現れる筆触によってアンビギュニティな絵画の本質を大型絵画で、それぞれは追究してきた。

それらの作品を前に、今年のギャラリートークは新進美術批評家、栗田大輔氏を招いて行われる。鷹見さんを失い、宙に浮いたゲストに栗田氏との提案がゼミ生からもたらされたのだった。2010年絵画新棟への移設時に旧アトリエを会場に、学生企画によって開催された卒業生、在学生の展覧会「camaboco 展」シンポジウムのパネラーであった氏とは、この夏、ゼミ生の何人かが鹿児島、奄美での滞在型アートプロジェクト「KOSHIKI ART EXHIBITION」に参加した際、関係はさらに深められていたのだった。

副題には「創造の揚力」が彼らによって掲げられている。大地である現実・リアルを離れ、大地と天との中間領域としてある空・イデアルにむかっただけのそれぞれの離陸である。離陸の後の飛行は揚力によって保証される。その揚力は既に彼ら個々の内部に準備されつつあるかのようでもある。

2012.1
東京造形大学教授 母袋俊也



TURNER GALLERY
〒171-0052
東京都豊島区南長崎6-1-3
ターナー色彩株式会社 東京支店
TEL: 03-3953-5155
<http://www.turner.co.jp/gallery/>

大江戸線 落合南長崎駅 } 徒歩 8分
西武池袋線 東長崎駅 }

松本加奈

Kana Matsumoto



「piece of colors」20×20×20cm, acrylic in plaster

1987 埼玉県生まれ
2012 東京造形大学絵画専攻卒業予定

2009 「5D -five dimensions-」
TURNER GALLERY (東京)

2010 「Q」gallery re:tail (東京)

「めの休まるどころ」
SPACE/ANNEX (東京)

2011 「KOYA Exhibition 祀り小屋」
旧下川邸 (東京)

「アィムアダイバー」
KOSHIKI ART EXHIBITION
2011 (鹿児島県薩摩川内市)



「幸福宣言」120.0×91.0cm, oil・acrylic・paper・georgette cloth

わたなべももこ

Momoko Watanabe

1986 宮城県仙台市生まれ
2012 東京造形大学絵画専攻卒業予定